京傳作

延命御誂染

長尺長壽小紋 上

通油町

屋板

京傳作
延命御誂染
長寿小紋
通油町
屋板
中
京傳作
延命御誂染
長寿小紋
通油町
屋板
下

命といふ字は誰が書いた。素服脱いで見せさんせ、嗚呼按摩鍼疵癖も百萬両の分限者も大切な命なり。ちんと命と總角も助六がうわみ苦労とよれば命とちがむる主あり命も、助六がために苦労をすれば、命を縮むることあり命あつての物種なれば、金を延さんより命を延ばさんにしかじ。命は食にあり。餅は棚にあり、命は養生にあり、養生は心にあり、一心命の花繡のろくなるのはいらぬもの、長くて惡いが鼻の下、長くてよいが命なりけり小夜の中山、餅より甘口なこの草紙を見て、笑うて延ばしたまへと、筆の命毛ながくしく、書きつけ侍り。

享和二年壬戌春　山東京傳戯記

命といふ字ハ誰が書き素服ぬいで見せんせ。嗚呼あんまちけんきも百万両の分限者も大切な命なり。ちんと命と總角も助六がうわみ苦労とよれば命とちがむる主あり命も、助六がためにくるしむれば命を縮むることあり命あつての物種なれば金を延さんより命を延ばさんにしかじ。命ハ食にあり。餅ハ棚にあり。命ハ養生にあり。養生ハ心にあり。一心命の花繡ろくなるのハいらぬもの長くて惡いが鼻の下長くてよいが命なりけり小夜の中山餅より甘口なこの草紙を見て笑うて命延ばしたまへと筆の命毛ながくしく書きつけ侍り

享和二年壬戌春　山東京傳戯記

錢金にも代へられぬものは命なり。世の中に大切なる物を、命から二番目といふ。さすれば命ほどの寶はなし。その命といふもの、何處から出るぞといふに天地造化の神、多くの命を仕入れて、忉利天の一丁目に店を出して、命の問屋をし給ふ。

命は人ばかりにあらず鳥類、畜類、魚、虫蟻、草木に至るまでそれ〴〵に仕入あり。鶴龜の長き命、蜉蝣の一期の短き、松の千歳、朝顔の一盛り、皆定まりの命なり。

木火土金水の五行は命の番頭なり。この五人にて、命を受持にして支配する故に、すべての人の命は、木火土金水の番頭持なり。一人缺けても命全からず。

命の仕入、符牒がついて刀掛のやうなものにかけてある。

日月の物指にて命の長短を計る。

「繁華の地は人の養生が惡うござれば多分短い命が賣れます。とかく長い命は田舍向でございます。

命といふもの、太く丈夫に見えても短きあり、
細くて弱々したるにも長きあり、
見かけにはよらぬものなり。
「一代の守本尊、わが預り子の
生れる度に、命の問屋へ來り給ひ、
それ〴〵の因緣に從ひて、或は長く
或は短き命を買ひとりて授け給ふ。
少しも依怙贔負はなされず、
兎角、長短は
定まれる因緣なり。
「命ばかりは賣買にならぬと
いふは尤もなり。
命を賣買にし給ふは
神佛ばかりなり。

八幡樣、お馬にて
買ひに來給ふ。

普賢菩薩、氣をつけ給ふ。
小象よ、その提げた命
を大事に持て、太く
丈夫なやうでも、ほつ
きりと折れ
るぞ。

「早野勘平に授
ける命は、三尺
に足るか足ら
ずてよい。

信濃屋のお半
に授ける命を
一尺四寸。
一八百屋お七
に授ける命

「男の命は二十五と四十二、
女の命は十九と三十三、
これらは
厄年というて
人が嫌ふ故に値段安し。
八十八は米の守とて、
目出度がる故、値段高値なり。
七十八十の命も、
よい〳〵になり、腰が抜けたり、
手足が利かなんだり、
老耄したりすれば、
生きてゐる甲斐もなき故
假令命が長くても
これらは、これらは
ひけ物にて値段格別安し。

東方朔が命は九千丈、浦島太郎は八千丈、三浦大介百六丈、皆これ天より定め給へる命にて、神佛のお細工にも伸び縮みの出來にくきものは命なり。然しながら、善をなせば短きも長くなり、惡をなせば長きも短くなる。とかく心の持ちやうにて、伸び縮みもまた無きにあらず。

「東方朔が命は槍の如し。浦島太郎が命は臺傘の如し。三浦大介が命は立傘の如し。この三色は表立ちたる大切な道具なり。命もまた人の爲に大切な道具なり。合點か〳〵。

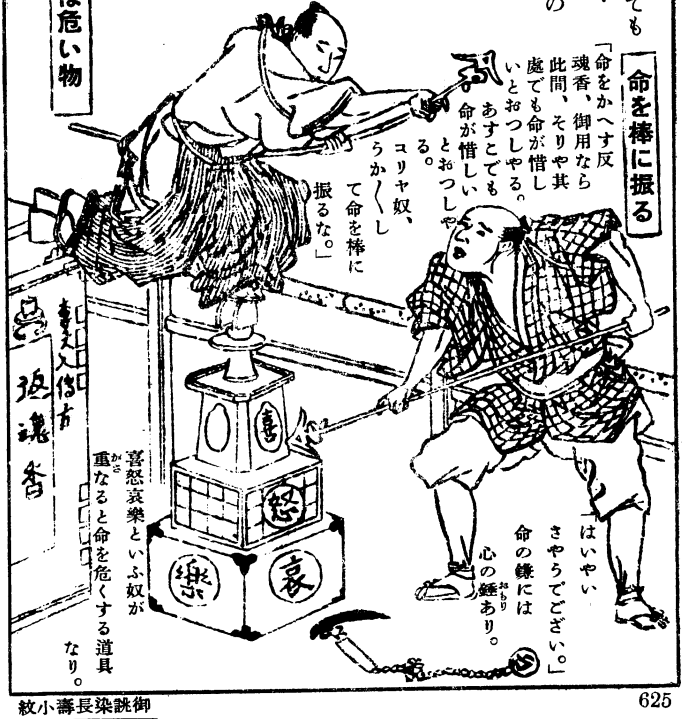
彭祖が命は鯨差にて七百丈顏回が命は上總木綿にて丈なし。長いもあれば短いもあるは、八百屋の縁の下と、人の命なり。

「己が命を鐘に譬へたは命を大事にしろ、遣り放しにするなといふ事だ。」

御誂染長壽小紋

莫邪が劒も持手による。長い命を授りても持手の手置が悪ければ中途で折れたり、先を縮めたりする事あり。これ皆一心の持ちやう悪しく、または不養生なるが故なり。

命といふものは、譬はゞ居合抜の刀の如し。大事の命を腰に差して高いところへ足駄穿いてのぼり、長い命を抜いて振廻すやうなものなれば、命ほど危きものはなし。悪くすると踏みはづして命を失ふ事あり。用心せずんばあるべからず。



命といふものは手置が大事なり。一心の手置が悪いと、如何ほど長き命を授かりても、我と我が手に縮めることあり。怒り、腹立ち、憎い、可愛い、喜び、悲しみ、惜しい、欲しいの類皆命を縮める役者なり。

命と思ふ袷質屋へ行く

「己が命と思ふ此上田の袷を曲げて買ふ鰹だ、負けさつせえな。」

「七十五日、生き延びようと思つて買ふに、片身とは氣にかゝる。思ひ切つて一本買ふべい。」

「錢を噛むやうな鰹だ。一切がやうつて百についてゐる。百までも生きようか。」

「それ御覽じろ、生きて居るいをだ。」

「隣では初鰹で生き延びるつもりだが、こつちは食はず飲まず、原吉原で命を延ばす、己が命よく延びる命だが、兎角子供等が何にかにつけて親の命を縮め居る。」

「嚏アに鼻毛をのばすと違つて命を延ばすのは手間がとれる。」

命を延ばさんとて金銀をふんだんにつかひ、上無き樂しみをしても、尻のつまらぬ事あれば、延ばした命却つて十層倍に縮まることあり。食はず貧樂といふ諺もあり、雪隱の窓から梅が香を慕ひ、肥船で月見をし、土用前に時鳥を聞き、盆過ぎに初鰹を食ひ、施餓鬼船の夕涼み、日蓮忌の芝居見物、接待茶を啜りながら燒團子をしてやり、小鰭の昆布卷で濁醪をひつかけても、樂しみに二色はなし。心さへ安ければ、命の延びること恰も小む(す)めの背丈、狸のきん玉、南風にあてたる飴のごとし。

「梅が枝もやつたわいナアと」らでいはぬは、質は餘程置くまじきものと見えたり。

命を延ばす

「とつさん、お前の命は飴の樣だ。坊に呉んな〳〵。」

「今日はよく命が延びました。したがお前ももう五十近いせえか、ところ〴〵命に皺がよりやした。火熨斗をかけやせう。」

世の中に命ほど大事なものはなけれども、その命と釣替なものは金なり。金といふやつが、得ては命にも向ふものにて、金には命をとられた事の昔から數へ盡し難し。

「命は長いほどがよけれども、年寄りて子なく、かゝらうしまも無き身にて、べん〳〵と長生するも亦慘めなものなり。

これは畢竟、命に手足を搦められる道理なり。

金は命と釣替

命と釣替にせねば金持にはなられぬ。たとへ命に代へても、たゞ欲しいものはかねだの大からくりだ。

金に恨みが數々どざる。親の金をつかふ時は、家業夢中と譽くなり。おのが金をつかふ時は、始終滅亡と譽くなり。正直律義の帳合は格別氣樂と稼ぐなり、聞いて驚く人もなし。

命が手足にからむ

「わしが亭主は水菓子賣でこがなし〳〵といつて賣り歩き、とう〳〵子が無くて、わしが此のさまになりました。」

女は執念の深きものにて、へびとなり　蛇となりし例多く、道成寺の縁起でも皆様御存じの事なり。

女の一心の蛇奴が紅猪口を嘗めた猫のやうに、紅の舌をべろり〳〵と出しかけ、塗簞笥の鋲のやうな眼を光らせ、解き捨てた丸紮のやうにのたつて男の命をとらんとする。かるが故に、美しき女を褒めて命とりめとは申すなり。

「好かぬ事をばいはしやんす。如何に流の身ぢやとても、心に二つはないわいな」と震へ聲になつて、ほろ〳〵と膝の上へこぼしたる涙は恰も蛇の卵の如し。そこで遂には男の命をとり畢んぬ。なんぼう怖しき物語にて候。

命とり

傾城は宵から蛇を使ひて寄りつかず、客は熱くなり、もうかへる〳〵といふ心を「何だえ、ばからしい」と、頭から呑んでかゝる。とかく女は男の命とりなり。

酒といふ奴は人の命を削る小刀なり。故に酒を飲むことをけづるといふ。鰹節の痩せるも削る故なり。楊子の細くなるも削る故なり。松板の薄くなるも削る故なり。鰹節も楊子も松板も掛替あり。人の命には掛替なし。削つたぐけは埋る事なし。

酒で命を削るは、小刀で削るやうなものなれば、まだ命の減るには手間がとれるけれど、女といふ奴は、男の命を削る鉋なれば、暫時のうちに、命が減るなり。用心すべし。女は命の敵藥なること、恰も金に燒味噌、

知事移馬
似松東

四

「もう飲めねえ これだく。」

「酒で命を削る」

「命を削ると知り乍らどうも酒がやめられねえ。どうするもんだの明神様へで願懸けをしようか。」

「さアいゝ爛だ。もう一つのめの若草とし粕へ、注き捨てられた爛冷しはあけてしまふがいゝ。」

公は寢酒の味知らずだ。」

「岩田の女やまはよく飲めるぞ。」

蛞蝓に鹽、西瓜に和中散の如し。

この女中、岩井喜代太郎が舞臺顔ときて、美しき上に手がたんとあれば、男の命を削ること附木屋の如し。

「今夜はまた遅いのかえ、但しお焦らしかえ、お忝けなどと云はれる度に命が削れる。

板を削つた鉋屑はまだ焚付にでもなるが、命を削りたる鉋屑は、たゞお醫者様の藥代となるのみなり。

いづれ命數はさま〳〵にあるが、中にも僅の命だまゝの川〳〵

女て命を削る

道行仇寝言
夢の浮橋

惡玉か何ぞと人の問ひし時、通と答へて消えなまじ、物思はする秋の暮、

向う通るは清十郎ぢやないか、かさ屋三勝半七といひかはしたる言の葉も、そりや可愛いのぢやない、にく布團、今切りかけたは兄さんか、あぶない〳〵の事ながら、おなかのやゝも早や三月、廿日餘りに四十兩、使ひ果して二分殘る、金より大事なこの命、捨てに行くとは大膳な、飛んだ茶釜ぢやないかいな、藥鑵と見せて頬被り、昔の身ならば

命を捨てに行く

「お前はよいところへ氣がつきなすつた。命を捨てる相談は、マア七八十年延ばしやせう。」

「ともわしは捨てねばならぬ命、ところを捨てずにこゝからうちへ歸るほどにそなたは後にとゞまつて、捨てるともどうともしやれ。」

「此作者は道行の夢を見たさうで文句は恰も寝言の如しだ。」

どのやうに、しやう模様は龍田川、
高尾も比丘尼も色の道、踏迷うたる
戀の道、因果ぢや、柳、糸柳、
繋がる縁や鵺の尾の、蛇
使ひてこれまでも、
生延びたのが徳若に、
小萬才三にお駒さん、
しまさん、
こんさん、中田圃、
一寸先はまゝの川、
遂の命の捨てどころ、
いざ彼處へと急ぎ行く。

忠臣水滸傳 京傳作 後篇五冊

當年出來賣出し申候

○**京傳店新物御披露**

△定九郎くずべ紙
煙草入品々
「これは手當りが羽二重で羊羹色なる故にかく名づけ申候

△遠州形
△富貴形
△立身形

右御多葉粉入新物、
此外品々新形あり、
いろ〳〵にも珍しき新形
あり。
委しくは誌し難し。

ある人酒に醉ひ、ひよろ〳〵しながら、川端を通り、踏みはづして川へはまり、命危く見えたるところに、折よくとん〳〵唐辛子賣通りかゝり、危き命を拾ひあげる。辛き命を拾ふといふことは、

この時よりぞ始りける。

「ひりゝと辛いが山椒の粉、
ひよろりと長いは、たしかな人の足であんべい。これは七色唐辛子ではなくて、名前の業晒しだ。」

「あゝあぶ内といふ奴さん
酒に醉つたと見えるわえ。」

辛き命を拾ふ

からだは沈む、命は昔噺の桃の
やうに流れて
行く。

命を玉の緒といひて、命の細きこと糸の如く、また露命といひて命の脆きこと露の如し。蜘蛛の網に荒れたる駒は繋ぐとも繋ぎかねるは命なりけり。

「命長ければ恥多し、四十にして死なんこそ目安かるべけれと、兼好法師の書殘されしも宜なるかな。長生をして恥多きは畢竟命の爲に苦しめらるゝが如し。

「一つ竈の細き煙の糸をもつて、露命を繋ぐは、千石積の船を絹糸で繋ぐよりも尚危し。

露命をつなぐ

「おれは長々の浪人者ではない。長生の業人者だ。」

命といふ奴が、時々洗濯せぬと、よく垢煩悩に汚れて、油屋の雑巾の如く汚れ、遂には命がねぐさるものなり。然し命の洗濯も洗ひ過ぐせば、手の皮を摺りむき、内證が綻びて、身代の地合が悪くなるものなれば、その程々を考へて洗濯すべし。

必ず洗ひ過ぐすべからず。

命の洗濯

「おやぼからしい、風をひきなんせうにえ。」

「湯屋でふんどしの洗濯する氣取だぞ。」「これがほんの金を湯水のやうに使ふといふのだ。何ときついか〳〵命の洗濯とはいふものゝ實は振られた恥を濯き出すのさ。」

心に皺みのこらぬ様に命の洗濯をするのだ。

襦袢なら一文が糊ですむが命の洗濯には小判
でなければ糊が利かねえ。
ウタ
「さても見事や、振もよし、
裸すがたのかはいらし、
様の締めたる犢鼻褌は
何と申すふんどしぞ。
ちりから
すた〳〵
ぼうす

御誂染壽長小紋

命の洗濯も、し過ぐせば大晦日に掛取が、野郎の冬瓜船か、五百羅漢の還俗したやうに詰めかけ、折角引伸ばした命を一時に縮める。

「命の縮むにもいろ〳〵あり。女故に命の縮むを業平縮といひ、金持の命の縮むを脹縮といひ、食物で命の縮むを舌切縮といひ、茶人の命の縮むを透綾縮といひ、かすりばかりとりたがる人の命の縮むを越後縮といふ。絹縮、木綿縮にも、それ〴〵に謂あるべし。

「命が縮む」

「前の衆、つまんで手短く理窟を云はつせえ、段々後に理窟がつかへて居る。」

「折角延ばした命が轆轤頸の夜明方、絞り放しの髷ゆはひ、寒い晩の睾丸の如く縮まつてしまつた。悲しや〳〵」

蛞蝓は蛙を恐れ、蛙は蛇を恐れ、
蛇は蛞蝓を恐れ、狐は獵人を恐れ、
獵人は庄屋を恐れ、庄屋は狐を恐る。
蚤虱の拇指を恐れるも、皆これ命が
惜しき故なり。
されば無益の殺生をし
　ものゝ命をとるべからず。
「放龜」放鰻　放鳥など、
命の親に恩を返したる
　ためし多し。

そばから龜が「これ雀、この
祝にちつとおごりやれ」といへば、
雀が「オ、さて合點ちや、アリヤセ、
コリヤセ、ヤツトセヨイ〳〵」といつて嬉し
がる。
これを名づけて雀おごりといふ。

「あなたは命の親で
ございます」と嬉
し泣きに
めそつと
鰻は
めそ〳〵
と泣く。

車の命は楔なり。扇の命は要。傘の命は轆轤なり、風鈴の命は短冊なり。親船に命綱あり、旅人に命金あり、いづれ命は大切なるものなり。

然るに、戀は曲者にて、その大切なる命も、戀ゆゑには失ひ易し。思ふ男を命にかけて、清水の舞臺から飛降りるも、皆戀といふ曲者の仕業なり。恐るべし。

命にかけて思ふ

萬一願のかなはぬ時は、皮は破れ骨は微塵になる。傘には古骨買もあるが、命の古骨は何にもならぬ。

御誂染長壽小紋

侍の命は譬へば辨當持の辨當、槍持の槍のごとし。ナゼといふに辨當持の辨當は、我が持ちながら我が物にあらず、槍持の槍も、まさかの時は旦那のものなり。侍の命は豫て君へ差上げておく命なれば我が命にて我が物にあらず。事ある時は命を的にかけて働かねば、忠義の人といはれざるなり。

命を的にかける

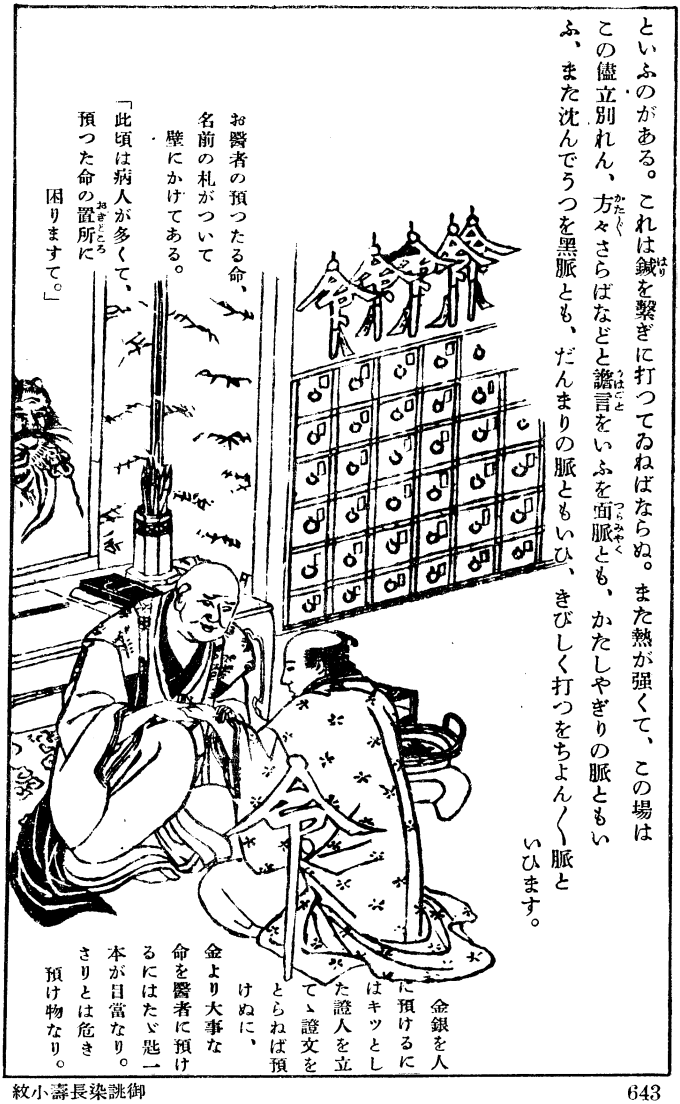
忠義

忠義は重く命は輕し

「忠義にならでは捨てぬ命」とは、加古川が金言だ。「命は大事のものだが、忠義の爲には輕い。世の中に忠義ほど重いものは無いぞ。」

世の中に醫者ほど大事の業はなし。
醫者は人の命を預る者なれば、
少しも油斷のならぬ業なり。
「お醫者様、脈の講釋をし給ふ。
「療治は第一に脈の見やうが肝腎
でござる。心痛の病で折々
胸先でぎつくりばつたりと
動悸の打つ脈を、名づけて
拍子脈といふ。
上方では早脈ともいひます。これは療治の
きつかけがむづかしう御座る。
また、女中など、強い癪で折々痞へる症の脈を
名づけて、脈間といひます。冷飯がきつい毒
でござる。
また、症によつて少しのうちに
いろ〳〵變る脈が御座る。これを名づけて
早變りの脈といひます。風引に引返しの脈

といふのがある。これは鍼を繋ぎに打つてゐねばならぬ。また熱が強くて、この場はこの儘立別れん、方々さらばなどと譫言をいふを面脈とも、かたしやぎりの脈ともいふ、また沈んでうつを黒脈とも、だんまりの脈ともいひ、きびしく打つをちよん〳〵脈といひます。



料簡が悪いと、僅の事に
早まつて命を失ふ事あり。
破鏡再び照さず
落花再び枝に上らず、
一度捨てたる命
再び戻る事無し。

「わしが此又手で命をすくつて
進ぜよう。さて〳〵危い事ぢや」と、
急な時は地口までがこじつけなり。
「質の流れるは利上げも出來るが、
命の流れる、仕方がない。」

命をすくふ

水ッ洟の流れるは
だらしなく
吸るがよし。
命の流れは、すくふがい。

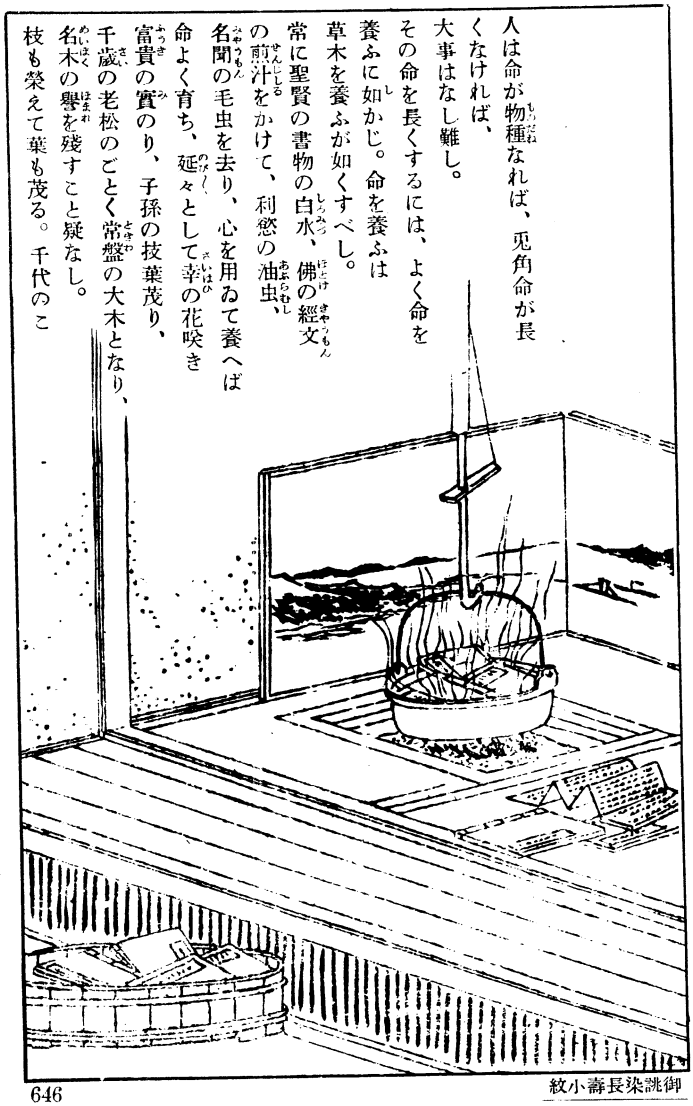
いらざる事を苦に病んで、
命を縮むべからず。
命あつての物種なり。
死んで花實の咲くことなし。
金の蔓にありつくも、金のなる木
を求むるも、名の高くなるも、
子孫のはびこるも、皆命が長く
なければ大事をなし難し。

「嬉しや〳〵おれも今年八十八になるが、
金の蔓も大分延びが見える。
名も殊の外高くなつて、天井へ突抜けさう
だ。
子孫も大分はびこつたわえ。
成程、命が物種だぞ。」

人は命が物種なれば、兎角命が長くなければ、大事はなし難し。

その命を長くするには、よく命を養ふに如かじ。命を養ふは草木を養ふが如くすべし。

常に聖賢の書物の白水、佛の經文の煎汁をかけて、利慾の油虫、名聞の毛虫を去り、心を用ゐて養へば命よく育ち、延々として幸の花咲き富貴の實のり、子孫の技葉茂り、千歳の老松のごとく常盤の大木となり、名木の譽を殘すこと疑なし。枝も榮えて葉も茂る。千代のこ



お目度やとは、この事なり。

「松は辛いと皆おしやん
すけれどな命の長いは
松の事だ。」

命を養ふ

先度初會の見立の時、客の金をせしめんと炉燵の蔭により給ふ　この客、俄に大俗となり、反吐をつき手を鳴らし、新造禿とふざけしより、客をきやほと申すとかや。

「それは老松の緩り、こつちは命といふ字の松の木が根強くなつて、どんな風が吹いても折れる氣遣ひはない〳〵つぶりだ。

「命といふ木は誰が植ゑた。白水かけて見せさんせ、あゝあんまりな」とこの爺さま、

江戸節をも、ちつとは唸つた人なり。

命の藥といふは、笑つて暮すほどの藥はなし。この繪草紙を御覽じて笑ひ給ふ子供衆は、命が延びて長くなり、命の置き所に困り給ひ、凧のやうに命の尻尾を糸卷に卷いて置くほどのことなり。

されば、初春の御進物、御年玉にもこの上の目出度き草紙はなし。誠に延命長壽の戯作なり。

御評判〳〵

京傳戯作

御誂染長壽小紋